

一八八四年九月六日(土)

タクール、聖ラーマクリシュナ、アダル氏邸において、ナレンドラはじめ
信者たちと共に

ナレンドラたちとキールタンの歎び——三昧境にて

タクール、聖ラーマクリシュナは、アダルの家の応接間で信者たちと共に坐っておられる。応接間
は二階にある。ナレンドラ、ムクジエー兄弟、バヴァナート、校長、チュニラル、ハズラー及び、そ
の他の信者たちがこの御方の傍に坐っている。時間は午後三時頃だろう。今日は土曜日、バッドロ月
二十二日。ベンガル暦一二九一年。キリスト暦一八八四年九月六日、黒分ついたち一日。

信者たちはタクールブッにあいさつナームの礼をした。校長が礼ブッをした後、タクールはアダルにおっしゃつ
た——「(医者の)ニタイ先生は来ないのかい?」

ナレンドラが歌をうたうことになつていたので、その準備をしている。タンプーラ(弦楽器)の調子
をととのえているうちに、その弦が切れてしまった。タクールは、「おや、何をしたんだね!」とおつ
しゃつた。ナレンドラは、こんどは太鼓パンヤの調子をみている。タクールは、「お前の太鼓叩きは、まる

で人の横つ面を引っ叩いているようだよ！」とおっしゃる。

キールタンの歌についての話題が出た。ナレンドラは、「キールタンにはむずかしい節回しや間のとおり方があまりありませんから——それで非常にポピュラーたり得るので、みんなが好むのですよ！」と言った。

聖ラーマクリシュナ「何言ってるんだか！ 人々の悲哀がよく表わっていて、しかもやさしくなくさめてくれるから、それであんなにみんなが大好きなんだよ！」

ナレンドラは歌いだした——

ああ 美しきかな 君の名よ

弱く貧しき者たちの避難所かくれが

一八八四年九月十四日に全訳あり

次の歌

主よ ああ わが日々は空しく過ぎゆく

希望の道をただ、日も夜も見つめて

一八八七年四月九日に全訳あり

聖ラーマクリシュナ「(ハズラーに向かつて) ハッハッハッハ、(ナレンは)初めてこの歌をうたうん

だよ！」

ナレンドラが続けて、二つ、三つ歌った後、ヴァイシュナヴァチャランが歌った――

おお、ハリよ、どうしてあなたと近づきになれよう

マトウラーの宮殿に暮らして、昔を忘れてしまつて

ヴラジャのバターを盗んだことも、何も思い出さずに――

聖ラーマクリシュナ「さあ、ヴィーナでハリ、ハリと称えよう――あれを一度うたつてくれないか」(訳註、ヴィーナ――弦楽器)

ヴァイシュナヴァチャランは歌う――

さあ、ヴィーナに合わせて、ハリ、ハリと称えよう！

めでたいハリの御足みあしに祝福されなくては

どうして至上の真理をさとることができよう

ハリの名で悲しみも消え去り

口からほとばしるハレ、クリシュナ！

ハリのお恵みがありさえすれば

もう何の心配も悩みもないのだ

ヴィーナにあわせて、一度ハリの名を称えよう

ハリの名なくては、地上の宝は空しいもの

僕、^{しも}ゴーヴィンダは嘆いた——どんなに多くの日々を

果てない海を泳ぎ渡ろうと、空しくもがいたことか——と

〔タクールの度々の三昧と踊り〕

歌を聴きながら、聖ラーマクリシュナは前三昧状態になられておっしゃる——「アハー！ アッ

ハー！ ハリ、ハリと称えよう！」

このような言葉を口にされながら、タクールは三昧にお入りになった。信者たちはタクールの周囲に坐って、その様子を拝見している。部屋は人であふれんばかりになっている。

キールタンの歌い手はその歌を終えると、また新しい歌に入った——

聖ガウランガは美しく

新しき偉大な踊り手

燃え上がる黄金^{こがね}のような

あの肌の色——

キールタン歌手が、ハリの愛に浸りてフレイズという句をくりかえした時、タクールはとつぜん立ち上がって踊りはじめられた。そして再び坐つて、両腕を伸ばしながら即興句をお入れになった――。

「さあいちど、ハリの名を称えよう」

タクールは即興句を入れながら前三昧状態になられ、やがて頭を垂れて三昧にお入りになった。枕がちよと目の前にある。三昧のために頭がたおれてしまったので、枕の上に頭の先端をつけていらつしやる。キールタン歌手は再びうたった――

ハリの名のほかに、この世に宝はなし

いざ称えよ 甘くやさしき声で

ハレ クリシユナ ハレ クリシユナ

クリシユナ クリシユナ ハレ ハレ

ハレ ラーマ ハレ ラーマ

ラーマ ラーマ ハレ ハレ

次の歌

ハリの名となえて私のガウルは踊る

私の金色の山々の間を

ほら、ガウランガが踊っている

紅紫あかむらさきの足に黄金の足輪が

チリン・リン、チリン・リンと鳴っている

ラーダーの愛にほだされて肉体からだをつくり

塵のこの世に下りてきて

共に従い踊っているのは

左にアドヴァイタ、右にニタイ

そして真ん中で踊っているのは

私のチャイタニヤ

タクールは再び立ち上がって、即興句を入れながら踊っておられる。

「愛にすっかり酔ったよ、ね！」

このすばらしい踊りを見ては、ナレンドラはじめ信者たちもジツとしていることができなかつた。皆、タクールといっしょになって踊り出した。

踊りつづけながらタクールは、時々三昧にお入りになった。深い三昧にお入りになったときは、一

言も口をきかず、身体は不動になられる。信者たちは、このお方の周囲をぐるぐる廻りながら踊るのだった。

—そうして、しばらくすると半意識状態になり——チャイタニヤデーシャ様もよくこの状態になったが——タクールは自然に獅子のような力強さで踊られた。その場合も、一言もおっしゃらないで、ただ、ただ愛に酔っていらつしやるのだ!

少しの間平常意識に戻れると、すぐ即興句をお入れになる。

今日のアダル家の応接間は、シュリーヴァースの庭になっている。ハリ称名の轟とどろきを聞こうと、家の前の大通りには無数の人々が集まつてきている。(訳註、シュリーヴァースはチャイタニヤのごく親しい学者で、この人の家でチャイタニヤは、神の愛に酔って踊り狂った)

信者たちと共に長い間踊った後、タクールは再び席にお着きになった。まだ半三昧状態である。その状態のままナレンドラに話しかけられた——「あの歌を——」マーよ、私を狂わせておくれを——」

タクールの仰おせを承うけたまわってナレンドラは歌った——

マーよ、私を狂わせておくれ

智識も分別も用はない

一八八四年十月十九日に全訳あり

聖ラーマクリシユナ「それからあれ、超越意識の海に——
ナレンドラは歌う——

超越意識チヂイナシダの海に 愛の波起フレイマニダこりて

大いなる歓び 甘露したたる遊戯の

美しさ譬たとえんかたなし

いと深き禪定ヨイガに全ては一つとなりて

時間と空間の隔差へだてはあとかたもなく消え去りぬ

今ここに、よろこび勇みて 両の手を高くかかげて

わが心よ、いざ唱え ハリ、ハリと称えて

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラに向かつて) それから、心の大空に——は? いや、あれは長すぎるね、ちがうかい? そうだ、少し、ゆっくり、ゆっくり!」
ナレンドラは歌った——

おお、心の大空チヂイカーシヤに 愛の満月ゆたかに昇り

おお、愛の海原 よろこびに満ちあふる

一八八二年十月十六日に全訳あり

聖ラーマクリシュナ「それからあれ——ハリの甘きぶどう酒」は？」
ナレンドラは歌う——

ハリの甘いぶどう酒を飲んで

心も体も酔ってしまったよ

地べたを転げまわりながら

ハリ、ハリと呼んで泣くんだよ

タクールが即興句をお入れになる——

愛に酔っぱらってしまつて

ハリ、ハリと呼んで泣くんだよ

気が違ったようになって

ハリ、ハリと呼んで泣くんだよ！

タクールと信者たちは少し休息した。ナレンドラは静かな調子で、ゆっくりとタクールに話しかけ

る——「あの歌を、一度お歌いになりませんか？」

聖ラーマクリシュナはお答えになる——「喉がすこし枯れてきたんだよ」

しばらくしてから、タクールはまたナレンドラに向かっておっしゃった——「どれにする？」
ナレンドラ「世界を魅する美しき姿——」

タクールは、ゆっくり、ゆっくりとお歌いになる——

世界を魅する美しいガウルを

誰かがナディアに連れてきたよ——

(巻毛に囲まれたその顔)

(雲間を走る稲妻か)

タクールは、もう一つお歌いになった——

恋しいクリシュナ来ないので

ひとり部屋居の切なさよ

恋しいクリシュナ わたしの髪なら

きれいに立派に編み上げて

バクルの花を飾るのに

ヘアバンド
(紐^{ヘアバンド}で大事に結ぶのに)

(クリシユナは黒い、わたしの髪も黒い)

(黒と黒とがいつしよになるよ)

恋しいクリシユナ、わたしの鼻飾りで

いつも鼻の間にはまっていたら――

(わたしの唇にいつもさわって――)

(あり得ぬことを思つてばかり)

(クリシユナが鼻輪になる筈がない)

恋しいクリシユナ腕輪になつて

わたしの腕についでたら――

(腕輪チャラチャラ鳴らして行くのに)

(両手をふりふり行くのに)

(クリシユナ、腕輪になつてくれたら、都大路を意気揚々と――)

前三昧状態での予見——ナレンドラたちを招く

歌は終わった。タクールは、ナレンドラ、バヴァナートはじめ、信者たちと話をしておられる。ハズラーが踊ったと言って、笑いながら話しておられる。

ナレンドラ「はっはっはっは、そうなんです。ほんの少し——」

聖ラーマクリシユナ「ハハハハハ、ほんの少しか！」

ナレンドラ「あっはっはっは、おなかと、それからも一つの品物が踊っていました」

聖ラーマクリシユナ「ハハハ、あれは自然にゆれるんだよ——ゆすらなくても自然にゆれるのさ」

(一同大笑)

シヤシヤダルの滞在している家で、タクールを招待しようとしているという話が出た。

ナレンドラ「その家の主人は、食事の接待もしてくるんですかねえ？」

聖ラーマクリシユナ「品行がよくないと聞いているんだ。好色漢だと——」

ナレンドラ「だから、あなたはあの日——シヤシヤダルと最初にお会いになった日に——あの家の人たちがさわったコップから水をお飲みにならなかったのですね。では、あなたはどうして、あの人たちの不品行をお知りになったのですか？」

〔以前の話し——シオルのフリダイの家でハズラーとヴィシユヌ派の人〕

聖ラーマクリシユナ「アハハハハ、ハズラーがもう一つの例を知ってるよ。郷里くりにで——シオルのフリダイの家で——」

ハズラー「その人はヴィシユヌ派の信者でしたが——私といっしょにタクールにお会いしようとして、フリダイの家に行きましたのです。行っておそばに坐ると、この方はすぐ彼の方に背を向けて坐り直されてね」

聖ラーマクリシユナ「叔母(母の姉妹)に当たる人と道ならぬことをしていたと、後になって聞いた。

(ナレンドラに向かつて) お前は以前に、言っていたっけね。わたしの境地はみな、心の幻覚だと——」

ナレンドラ「わかるわけがなかったでしょう！ 現在いまはいろんなことを沢山見てきましたから、みんなあなたが正しいのです！」

ナレンドラは、タクールは半三昧状態のとき、人々の内側も外側もみな見ることがお出来になると言った。このことについては、数多くの例を見てきたそうである。

〔タクール、聖ラーマクリシユナと信者のカーストの区別〕

タクールと信者たちを接待するために、アダルは様々のものを豊富に準備していた。彼は、賓客たちに向かつて、用意した食べ物をさかんに勧めている。

マヘンドラとプリアナート(ムクジェー兄弟)に向かつてタクールはおっしゃった。「どうした、お

前たち、食べないのかえ？」

彼等はいねいに答えた——「私どもは、ご遠慮させていただきます」（訳註——ムクジエー兄弟はバラモン階級なので、自分たちよりも低いカーストの者が作った料理は食べようとしない）

聖ラーマクリシュナ「ハハハハハ、お前たちは何でもするくせに、これだけは遠慮するのかね。

ある人の義父しよふとと夫の兄の名が、ハリとかクリシュナという名だ。その場合でも、ハリの名を称えなければならぬだろうか？——それに、ハレ クリシュナと唱えるわけにもいかない。だからその人は、こんなふう（訳註）に称名している——

フォレ フルスト フォレ フルスト

フルスト フルスト フォレ フォレ！

フォレ ラーマ フォレ ラーマ

ラーマ ラーマ フォレ フォレ！」

（訳註）インドでは、尊敬する人の名前を呼び捨てにしないように、目上の人や自分の夫の名前を呼んではいけないことになっている。この風習は今でも残っている。右の歌の元の歌詞は「ハレ クリシュナ ハレ クリシュナ クリシュナ クリシュナ ハレ ハレ！ ハレ ラーマ ハレ ラーマ ラーマ ラーマ ハレ ハレ！」

アダルのカーストは金商人(比較的低いカースト)である。だから、バラモン階級の信者たちのうちある人々は、最初のうち、彼の家でものを食べるのをためらっていた。しばらくして、タクール、聖ラーマクリシュナその人が、そこでものを食べておられるのを見たとき、彼等は目が覚めたのであった。夜も九時近くになっていた。ナレンドラ、バヴァナートはじめ信者たちといっしょに、タクールは楽しそうに食事をなさった。

やがて、応接間に戻って休息なさる——ほつほつ南神村ドフキネンヨルにお帰りになる時分である。

明日の日曜日に、タクールをお喜ばせるために、ムクジュー兄弟は南神村ドフキネンヨルでキールタンを催す用意をしていた。キールタン歌手のシャームダースが歌うことになっている。ラームは自分の家でシャームダースにキールタンを習っている。

タクールは明日、ナレンドラドフキネンヨルに南神村に来るようにとおっしゃる。

聖ラーマクリシュナ「(ナレンドラに)明日おいでよ、どうだい?」

ナレンドラ「はあ、そうするように努力します」

聖ラーマクリシュナ「あそこで水浴して、食事をおし。この人(校長)も来て食事しなさるよ。(校長に向かつて)——お前の病気はもういいんだね? もう、食事療法はしなくていいんだね?」

校長「はい、かまいません。——私も参上いたします」

ニティヤゴパールはプリンターヴァンに行っている。チュニラルは数日前にプリンターヴァンから戻ったばかりである。タクールは彼に、ニティヤゴパールの消息をお聞きになった。タクールは

南神村ドツキネンシヨルに向けてご出発なさるところだ。校長は平伏して、このお方の御足ミアシに額ぬかずいてごあいさつ申し上げた。(訳註——インドでは、聖者、賢者への敬意を表して、ひざまずいてお御足ミアシに触ったり、頭をつけたりして挨拶をする習慣があり、ブラナムという)

タクールはやさしく彼におっしゃる——「じや、明日おいで。(ナレンドラたちにやさしく) ナレンドラもバヴァナートもおいでよ」

ナレンドラ、バヴァナートはじめ信者たちも、床ゆかに額ぬかずいてタクールを拝した。タクールの今まで見たこともないようなキールタン歌唱のお歓びと、キールタンにあわせて信者たちと踊られた様子を思い浮かべながら、一同はそれぞれの帰路きりちについた。

今日はバッドロ月の黒分くろぶん一日いついち。夜も月光で明るく、まるで笑っているかのようだ。タクール、聖ラーマクリシュナは、バヴァナート、ハズラー等の信者たちと共に、馬車ドツキネンシヨルで南神村の方角に向かつて行かれた。